

P 中学校（通級指導教室）

【学校の概要】

P 中学校は、学級数（平成 27 年 5 月 1 日現在）が通常の学級 9 学級、特別支援学級 2 学級（知的障害、自閉症 - 情緒障害）である。LD - ADHD 等通級指導教室があり、自校及び他校の 10 名の発達障害のある生徒が利用している。ICT に関わる校務分掌「情報教育」があり、教員 1 名が担当している。ただし、学校として ICT に関する研修や研究は特に実施していない。

【特徴的な点に関するまとめ】

校内には大型ディスプレイがあり、DVD やパワーポイント画面を表示するときに使用している（図 4-3-7）。平成 25 年度の近隣大学が指定された文部科学省委託事業「発達障害のある子どもたちのための ICT 活用ハンドブック」への協力をきっかけに、それ以後、通級指導教室では

ICT を積極的に活用している。平成 25 年度には上記事業により、通級指導教室に iPad を 4 台導入し、Wi-Fi を設置した。また、担当職員の ICT 活用スキル向上のために、研修の実施（先進校訪問、講演会参加、など）近隣大学の大学生による指導・援助、通級指導教室担当者会議での情報交換（年数回）などが行われていた。

対象生徒は、定期試験では 0 点をとることもあったが、通級指導教室で読み上げソフトを使ってみると 60 点取れることがわかった。現在は、通常の学級でも読み上げによりテストを受けており（全教科、教員による読み上げ、別室受験）在籍校と連携して、高校入試での特別措置を検討している。漢字読み方アプリなどを活用することで、特に読みにおける困難が軽減され、学習や学校生活に対する自信につながっていることが推察される。なお、本事例で使用していた漢字読み方アプリケーションは、手書きで書いた漢字を認識して候補となる漢字がいくつか表示されるので、ユーザーは表示された候補の中から読み方を調べたい漢字を選択することで、その漢字の読み方や書き順を知ることができるものであった。

【特徴的な事例】

（1）児童生徒が参加する授業

- ①教科名等および単元・題材名等 自立活動
- ②授業の目標および観点別学習状況の評価の観点

iPad やフラッシュカード等を利用し、自分で漢字の読みを調べたり覚えたりすることができるようになること。

（2）児童生徒の実態

- ①学年 2 年生
- ②指導の場 通級指導教室（LD、ADHD 等）
- ③児童生徒の障害および課題（特性・ニーズ）

診断はないが、LD と推定される生徒。読む（読みの速度は小学校 1 年程度）書くことが苦

手な一方で、他の領域の能力は比較的高い。コミュニケーションにも問題がなく、友達関係も良好である。英語検定は準2級を取得している。書字は遅いが、丁寧に書き写すことができる。

(3) ICT 活用について

①使用した支援機器・教材の名称

タブレット型コンピュータ、漢字読み方アプリケーション「常用漢字筆順辞典」

②活用のねらい

自分の力でわからないことを調べさせる。

③授業における支援内容

漢字の学習において、読み方や筆順がわからない漢字に出会った際に、タブレット型コンピュータ (iPad) にインストールされた漢字読み方アプリを活用しながら自分で調べて学習を進めていた。

④ ICT 活用による児童生徒の変容や評価

わからない漢字の読み方を自分自身で調べられるようになり、漢字の学習に意欲的に取り組むようになった。また、生徒が学習時に抱えるストレスが軽減された。

(玉木宗久、西村崇宏)



図 4-3-7 通級指導教室に設置された大型ディスプレイ

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究—学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理—」（平成 28 年 3 月），106 -107 に記載された内容である。